

ウェルビー

額田一代記：映画編

本日は、私の人となりを皆さんに理解していただきたく、自分のこれまでの人生をかけ足で振り返ってみたいと思います。私は、映画が三度の飯よりも大好きで、家の中にビデオ、レーザーディスク、DVD、ブルーレイが散乱しています。これまでの人生で、強く影響を受けた映画のことに触れながら、額田一代記を語らせていただきます。しばしの間のお付き合いをお願いします。

小学校は地元（当時は那賀郡粉河町、現在は紀の川市）の小学校で、小学生時代のベストは、東宝の「キングコング対ゴジラ」（本多猪四郎監督）です。小学4年生の頃だったと思いますが、ゴジラが勝つか、キングコングが勝つか、クラスの中で大盛り上がりになり、さながら日米対決の決戦モード状態でした。結果は、猪木対アリを彷彿とさせます。もう一つは、6年生の頃に観た、同じく東宝「三代怪獣 地球最大の決戦」（本多猪四郎監督）です。異常気象のために、冬にも関わらず夏のような暑さで、今年の猛暑を予言していたかのような内容です。そんな異常気象の中、宇宙から飛来した隕石からキングギドラが出現します。オールマイティの宇宙怪獣キングギドラに対して、地球怪獣のゴジラ、モスラ、ラドンが協力して戦います。チームワークの大切さは、今も昔も変わりません。

中学校は和歌山市にある中学校に進みました。車で1時間余りをかけて、通学しました。当時の和歌山市の玄関口は「和歌山市駅」で、現在の「和歌山駅」も存在していましたが、とても侘しい雰囲気でした。中学時代のベストは「ミクロの決死圏」（リチャード・フライシャー監督）です。中学2年生頃に、和歌山市の映画館で見ました。人体がミクロ化され、同じくミクロ化された潜航艇に乗って、テロで脳出血を受傷した科学者を血管経由で治療に向かう内容です。現在の脳血管カテーテル治療を予見したような映画です。

虹の彼方のどこかで (Somewhere over the rainbow)



第 65 号 2025 年度 冬

【経歴】

東京大学医学部（昭和 53 年）
浜松医科大学大学院（昭和 60 年）

みどりクリニック所長 額田 敏秀

ぬかだ としひで



動静脈瘤のために静脈に入っしまい、脳に向かうには心臓を通過する必要があります。しかし、心臓内圧に潜航艇は耐えられない。さてどうするかなど、よく練られた脚本です。さらに、血管内皮細胞や赤血球の造形など、美術も素晴らしかったです。また俳優では、ラクウェル・ウェルチの曲線も良かったですが、敵のスパイ役の دونالد・プレザンスが好きでした。この映画を観てから、漠然とではありますが医者になりたいと思いました。

高校は大阪の天王寺区にありました高校に進学しました。実家からの通学は困難であったため、1 年生時は堺市に、2、3 年生時は羽曳野市に下宿をしました。高校時代のベストは「2001 年宇宙の旅」（スタンリー・キューブリック監督）です。脚本に SF 作家のアーサー・C・クラークが参加しています。内容は一言では語れません。未見の方はぜひ DVD をご覧ください。後に、大学生の時にリバイバル上映がありました。初回から終回まで、パンと牛乳持参で 1 日映画館にいたことがありました。この映画を観てから、思考や記憶に興味を持ち、脳の基礎研究の道に進みたいと考えるようになりました。もう 1 本のベストは、東宝「日本海大海戦」（丸山誠治監督）です。特技監督円谷英二の最後の仕事で、そのミニチュアワークたるや最高です。友人と二人で観に行きましたが、続けて 2 回も観てしまいました（当時の映画館は、入替制などという無粋なものはありませんでした）。大学受験に失敗し、東京の予備校に通いました。住まいは、千葉県にあった予備校の学生寮です。予備校生時代のベストは、「トラ・トラ・トラ！」（またもりチャード・フライシャー監督、日本側監督は舩田利雄、深作欣二）です。ミニチュアではなく本物の迫力に圧倒されました。真珠湾攻撃にちなんで、12 月頃に公開されたように記憶します。新宿の映画館で観ましたが、映画館の外まで映画の爆裂音が聞こえていました。

大学は東京の大学に進みました。入学は 4 月でしたが、学生運動の煽りを受け、授業は夏頃から始まりました。教養課程が 2 年間、専門課程が 4 年間の学生生活です。教養課程の 1 年生の時に、放射線基礎医学教室が開催する夏季研修に応募し、友人と私の二人が研修できることになりました。人生初めての基礎医学研究の第一歩を踏みしました。テーマは、マウス扁平上皮癌に対する放射線の影響でした。教室の助教授の先生の指導のもと、マウス飼育室に 1 日閉じこもり、放射線照射後のマウス肺の扁平上皮癌を切除し、鋏で細断、酵素で分離し、単一細胞までバラバラにする作業を繰り返しました。分離した単一の癌細胞を、寒天入り培地で培養し、生き残った細胞数をカウントします。お陰で、マウスの動物臭が衣服や身体に染みつき、下宿先の飼い猫にまわり付かれて困りました。大学生時代のベストは、リバイバル上映でしたが、「七人の侍」（黒澤明監督）、「人間の条件全 6 部」（小林正樹監督）、「宮本武蔵全 5 部」（内田吐夢監督）です。七人の侍、野武士を村に引き入れての最後の死闘、降り頻る雨、弓をふり絞る勘兵衛、野武士の凶弾に相次いで斃れる久蔵、菊千代、泣き崩れる勝四郎。宮本武蔵、一乗寺下り松、吉岡道場一門対武蔵ただ一人、泥田の中の死闘。瞬きさえ許さない圧倒的な戦いのシーンです。過呼吸になりました。また、人間の条件、俳優仲代達矢、渾身の演技、いやもう演技ではないと思いました

（これを書いている時、仲代達矢さんの訃報の放送が流れてま

した）。いずれも、映画館でのオールナイト一挙上映で観ました。朝帰りの電車の中で感じた充実感は、今でも忘れません。それともう 1 本。「旅芸人の記録」（テオ・アングロプロス監督）です。旅一座の家族とその出し物を通じて、ギリシャ現代史を俯瞰します。4 時間弱の上映時間でしたが、お尻の痛みも感じず見入りました。

医学部を卒業して、医者としての第一歩は、私立大学の第二外科学教室（脳神経外科）の教室員としてスタートしました。毎日が忙しく、映画を観ている時間はありませんでした。ただ、東京 12 チャンネルの正月番組で、「人間の条件」と「宮本武蔵」の全編が一挙放送され、再見できたことは幸運でした。開頭手術のたびに、脳が輝いて見え、脳の魅力に取り憑かれました。脳の基礎研究をする決意を固めました。

当時、脳や神経の基礎研究、特にタンパク質を扱う生化学的研究を行っている若手研究者は新潟と浜松の 2 ヶ所におりました。寒いのが苦手な私は、浜松を選びました。うなぎも美味しかったので。大学院生となり、食肉市場に通い、放るもののブタの脳より尾状核を採取し、細胞膜を調製して、膜に含まれるムスカリン受容体の結合特性の基礎研究に従事しました。この頃より、研究があまりにも面白く、映画とはずっと疎遠になりました。

「ET」（スティーヴン・スピルバーグ監督）なども観ましたが、ベストには遠いものでした。その後、京都の大学で助手になり、東京の大学で講師を務め、東京都の研究所で自分の研究室を持ちました。ムスカリン受容体と共役する G タンパク質について、1 分子レベルの働きから個体レベルの働きまで、総括的に明らかにしようともがいていました。G タンパク質によるイオンチャンネルの調節機構について、論文も書くことができました。若者脳のうちは基礎研究に打ち込み、大人脳になったら臨床の現場で働きたいという希望を持っていました。東京都の研究所を退職後は、共同研究をしていた循環器内科の先生の指導のもと、2 年間みっちり在宅診療を埼玉県で学びました。常勤医 3 人、非常勤医 3 人で、約 600 人の在宅患者さんの訪問診療や往診を行い、1 日 30 件程度の定期訪問を実施していました。夜間当番が 1 週間に 2、3 度回ってきて、毎回必ず 1 件以上の往診をしました。その後、母親の介護が必要になり、生家のある粉河に帰ってきました。縁あってみどりクリニックにお世話になり、はや 10 年以上が経ちます。

和歌山に帰ってから観た映画で印象に残っているのは、「おみおくりの作法」（ウンベルト・パゾリーニ監督、近藤先生に紹介して頂きました！）、「ストックホルムでワルツを」（パール・フライ監督）、「神々のたそがれ」（アレクセイ・ゲルマン監督）、「聖地には蜘蛛が巣を張る」（アリ・アッバシ監督）、「関心領域」（ジョナサン・グレイザー監督）、「オープンハイマー」（クリストファー・ノーラン監督）です。こんな私です。今後ともよろしくお願いいたします。



新年のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。

今年は、紀和病院の前身である南労会松浦診療所が設立されて 50 年となります。

松浦診療所は残念ながら昨年その役割を果たし、幕を閉じましたが、私たちは、南労会紀和病院グループとして伊都橋本の地に拠点をうつして活躍しております。南労会グループの何よりの特徴は、「働く人々の命と健康を守る」ことです。

今でこそ、人間関係も含めて働きやすい職場環境があって当然と受け止められていますが、50 年前には埃まみれの職場、騒音も振動も耐えがたいような機械を使っただけの仕事が当たり前のように行なわれていました。当然、仕事で身体をこわす人が出てきます。そのような人たちを守り、治療していく場として松浦診療所が発足し、その流れを受けて紀和病院が生まれました。

昨年 12 月に行なわれた医療監視で、カルテへの職業歴の記載の抜けのないように要望がありました。これまでそれを指摘されることもまずありませんでしたので今回の指摘は驚きでした。しかし、職業歴は、現役の方はともかく、リタイアされた患者さんと接するときに、過去に社会とどうつながっていたのかを知る上でもとても大切な視点で、私たちがずっと訴え続けてきたことです。過去の仕事が今の病気に影響を与えていないか、身体にストレスを与えていないか、逆に、仕事への誇り、自慢等が、コミュニケーションのきっかけになることも多々あるのです。

これからも、医療の中に仕事の重要性を強調しつつ、地域社会に開かれた病院であり続けて行きたいと思います。

理事長 佐藤雅司

新年明けましておめでとうございます。

皆様には、希望に満ちた新春をお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。

また、昨年中は当院の医療・介護活動に対し、多大なるご支援とご協力を賜りましたこと、職員一同、心から御礼申し上げます。

紀和病院は、「命の輝き」を大切にす医療・介護を理念として掲げております。患者さんの「命の輝き」を支えるためには、まず職員自身が心豊かに、自らの仕事に誇りと喜びを持って働ける環境が欠かせません。職員が幸せであるからこそ、患者さんへ温かい笑顔と質の高い医療・介護を提供でき、地域社会に貢献できると信じております。

また、職員たちは患者さんの治療により大きく貢献できるよう、日々最新の医学知識を学び続けております。

さらに、新しい治療法の開発にも積極的に研究を進め、その成果を国内外へ発信するなど、学術的な取り組みにも力を注いでいます。こうした不断的な努力が、当院の医療の質を高め、患者さんの「命の輝き」を守る大きな原動力となっています。

昨年度は、職員一人ひとりがやりがいを感じながら活躍できる職場を目指し、組織づくりやコミュニケーションの改善に継続的に取り組んでまいりました。まだ道半ばではありますが、互いを尊重し、支え合い、そして成長し合える環境づくりを引き続き推進してまいります。

職員の輝きが、患者さんの「命の輝き」を支える力となり、そして地域にとって不可欠な存在となれるよう、今年も全力で取り組んでまいります。

本年も変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

病院長 池田直也





「患者さんにご家族両方を大切にする看護がしたいです」

“Reliable”という言葉には「信頼できる」という意味があります。このコラムでは病棟で働く「リライアブルナース」のひとり取材し、現場の様子やそこで働くスタッフたちの魅力についてお伝えします。

―「回復期リハビリテーション病棟」とはどのような病棟ですか？

病気になると体力や気力が落ち、せっかく退院しても寝たきりになったり生活の質が落ちたりする可能性があります。この病棟では、多くの専門職がチームを組んで、心身の回復をはかりながら「家で生活する」ことを目指したリハビリテーションを提供しています。

― 病棟での仕事にはどのようなものがありますか？

日々の業務として、生活環境を整え、食事・着替え・入浴といった日常生活が送れるよう援助しています。また退院後の生活を考えた専門スタッフとの協議、患者さんへの説明、退院後の生活にかかわる方々との調整も大切な仕事です。

― 仕事でとくに難しさを感じる場面はありますか？

退院に向けた調整では、患者さんやご家族の気持ちを尊重して関わることを大切にしています。退院先や各種サービスの利用、家の改修などに関してご家族と連絡を取り、思いや考えを聞いたり、準備の進み具合を把握したりするよう努めています。その中で、準備を進めるのが難しいときや、それぞれの思いがすれ違うときに難しさを感じます。



― どんなときに看護師としてのやりがいを感じますか？

以前入院されていた患者さんで、ご本人は自宅への退院を強く希望される一方で、ご家族は自宅での介護に限界を感じておられました。自宅で介護してあげたい気持ちと葛藤しながら毎日のように面会に来られており、私はご家族と積極的に関わり、思いに寄り添えるよう努めました。施設への退院が決まったとき、患者さんに希望を持ち続けてほしいと思い「施設でもリハビリができるので、お家に帰れるよう引き続き頑張りましょうね」と声をかけさせていただきました。単に退院先を調整するだけではなく、双方の思いに寄

り添いながら声掛けをする大切さを学んだケースでした。退院の時に患者さんにご家族から、笑顔で「ありがとう」と言っていたことは、今でも私の心に残っています。

― これからどんな看護師になりたいですか？

この病棟は患者さんだけでなく、ご家族と関わらせていただく機会が多いです。

“患者さんにご家族両方を大切にできる看護師へと成長したいです”



医療安全推進週間

2025年11月19日（水）～11月25日（火）

～患者さんと職員はお互いが大切なパートナー～

今回、職員は「安全を守るチーム医療実現のために心がけていること」、また入院患者さんを中心に「病院で感じた“やさしさ”」「安心できた出来事」などのメッセージをカードに記入し、「みんなの想いがつながる『医療安全の木』」としてツリーに貼付け、1週間掲示させていただきました。

心温まるメッセージを多数いただき、改めて医療安全に対する職員の認識向上ができました。





一期生
石本桜花 Ns

当院では新人看護師が「なりたい看護師」を見つけられるよう、最初の一年で様々な部署を経験することになっています。11月までにどれくらいの部署を経験したか石本Nsに尋ねてみました。

急性期病棟や慢性期病棟、退院を目指すリハビリ病棟、手術室で働かせてもらいました。いろんな部署を経験して初めて理解できることがあったり、いろんな先輩と関わったりするのがうれしいです。

看護師の仕事を覚えていろんな部署を経験すると、4月のころとは意識も変わってきます。

患者さんに看護師として接するようになり、責任感が増してきました。患者さんと密に関わり、いろいろ話をさせてもらうことで、患者さんの背景や想いをより一層意識するようになりました。

患者さんをより深く知るようになると「自分には何ができるだろう?」と考えるようになります。石本Nsの場合は・・・

患者さんが退院された後に、その人らしい生活ができるような援助がしたいと思っています。入院前と同じ生活に戻るの難しいかも知れないけど、その人が望む生活が送れるお手伝いができるようになりたいです。今は、そうした援助につながる部署で働けられたらと思っています。

少しずつ「なりたい看護師」の姿が見えてきた新人看護師たちを、これからも見守ってください!

古佐田丘中学校



職場体験

九度山中学校、古佐田丘中学校の生徒さんが職場体験に来てくれました! 職員との交流を通して医療の仕事に触れていただきました。



九度山中学校



2025年度 KIWA IV ナース研修



患者様により質の高い静脈注射技術を提供することを目的としたKIWA IV ナース研修を今年度も開催いたしました。

今回は院外からも研修参加がありました。

合格者は名札に**バッチ**がついております。ぜひ名札にもご注目下さい。

これからもスキルアップに努めてまいります。

